倫風宏話

ふたたび「もったいない」について

上廣榮治

年頭のご挨拶で、私はケニアの女性環境保護活動家ワンガリ・マータイさんの「もったいない」運動に触れました。日本語の「もったいない」には、自然や物に対する感謝と尊敬の念が込められているというマータイさんの考えに、深く共感したからです。

私たち日本人は長い間、自然や物に対する感謝と尊敬の念を忘れることなく暮らしてきました。自然の恵みに感謝しただけではありません。大量生産・大量消費の渦に巻き込まれた今日に比べれば、私たちが若かったあの頃は、身の回りの物も驚くほど大切にされていたものです。入学祝いに貰った万年筆や時計は、まるで宝物のように大事にしたものでした。

着物は洗い張りし仕立て直して着つづけましたし、よい着物は親から子へと受け継がれました。自転車も一生ものでしたから、油布で拭き、壊れるたびに修理して使いつづけました。まだ、「もったいない」の精神が、至るところで生きていたのです。

ところが、そんな「もったいない」の精神が、いつの頃からか急速に薄れていきます。どんな物でも、お金さえ出せば簡単に手に入る。お金がなくてもカードがあれば、いくらでも自分のものになる。そんな「錯

覚」が当たり前になったからです。しかし、それはとても危険なことでした。カードの信用は実態からかけ離れた虚妄のものだからです。

それだけではありません。私たちが消費するすべてのもの、すべてのエネルギーが、限りある地球の資源から作られたものであるからです。私たちが消費するもので、自然の産物ならざるものはなく、自然は無限ではないのです。

それなのに人類は、大量消費のために自然を破壊し、地球環境を壊しながら、倍々ゲームのように人口を急増させて、大量消費を謳歌するようになったのです。このままでは、資源が枯渇し、自然が滅びる日は必ずきます。

私たちに無上の恵みを与えつづけてきた太陽も、人間によるオゾン層の破壊によって、皮膚がんを引き起こす有害紫外線を発するものとして、恐れられるようになってしまいました。

山野を潤す雨も、工場排煙や自動車の排気ガスで酸性雨となって、森を枯らしています。すべては、私たちの大量消費のなせるところです。人類が「もったいない」を忘れたために、自然は不自然へと変異しつつあるのです。

不自然なものといえば、今の経済危機を招いた金融の世界がそれです。たとえば、月収二十万円の若者が勧められるままに何十枚ものカードを持ち、気がつけば何百万もの借金を背負っている。そんな事例が、頻発しています。いつの間にか、実態と信用がかけ離れた虚妄の世界が広がっていたのです。

同じように、ここ数十年間にわたって、現実の価値とはまるでかけ離れた虚妄の仮想経済が、世界中で横行しています。いわゆる投機です。日本がまだバブル経済に突入していない昭和六十（一九八五）年、作家の司馬遼太郎さんがアメリカを訪れて『アメリカ素描』という紀行を書いています。

司馬さんは言います。アメリカでは証券会社はもちろん、銀行や保険会社までが集めた金で投機をしている。「投資」ではなく「投機」、つまりバクチをしている。「バクチでありつつもソンをしないシステムを開発しては、それへカネを賭け、カネによってカネを生む。『アメリカは大丈夫だろうか』という不安をもった」と書いています。

「投資」とは、より善いものを作るための設備や原料、人材などに資本を投下し援助することです。次世代を担う子どもたちの教育に資金を出すのも、一種の投資です。

いずれにしても、資本を持っている人や機関が資金を提供して、現状をより善く変えようというのが投資です。投資はたとえ当初のもくろみ通りにはいかなくても、より善い社会、より善い生活を目指して投じられた資金は、必ず何らかの改善に結びつきます。

しかし「投機」は違います。司馬さんが言うように、何も生み出さないバクチそのものです。物づくりにも人づくりにも、より善い生活や社会の改善にも無関係です。ただ、「カネによってカネを生む」ことをねらって賭けるだけなのです。

金融機関やヘッジファンドは将来の価格の変動を予想して、価格の差から生じる利益を得ようと莫大な金額を動かします。価格が数十円動いただけでも、数億円の儲けです。

大きな金額が動くことで金融商品の価格は変動しますが、実際に物の価値が変わるわけではありません。高騰した分だけ実態と乖離（かいり）した虚妄が生じただけなのです。

たとえばバブル経済の時代、五年前に二千万円だったあるマンションの一室が七千万円まで高騰し、バブルがはじけると、また二千万円以下に下落しました。部屋そのものの価値は変わらないのに、価格だけが乱高下したのです。

そもそも、金銭が幻にすぎないことは、誰もが頭ではわかっています。それは、ただの印刷された紙切れでしかありません。ただ国によって定められた価値の尺度にすぎません。

とはいえ、貨幣はそれなりに社会の実態を反映しています。月収二十万円の若者は、貨幣では二十万円までの買い物しかできません。貨幣だけを使うかぎり、やっとの思いで手に入れた品物には、まだ「もったいない」という感情がつきまとい、大切にしようとするはずです。

昨今の不況騒ぎは、すべて「カネがカネを生む」投機の失敗から生じたものです。それなのに、「もったいない」レベルで生活している、投機とは無縁の人々までをも巻き込む不況となってしまいました。

しかし、もし世間一般の人々が、自然や物への感謝と尊敬の念を取り戻したなら、虚妄の世界も影をひそめるのではないか。そんな思いが私にはあります。

年頭のご挨拶では、私たちにとって「最も大切なもの」「いちばんもったいないもの」とは何か。それは「いま」という時を無駄に消費してしまうことだと申しました。

しかし、だからといって物や金銭についての「もったいない」を忘れていいと申し上げるつもりはありません。虚妄に捉われず、自分と自分の身の丈に合った生活をすること、生活の中に「もったいない」を据えて健全な「いま」を生きること。そしてもちろん、我も人もの仕合わせを目指して実践すること。そんな一年にしたいと思っております。